現代日本人と「たましい」の問題

山　添　　正

1．シャーマンの定義

ある人の心身の不調に対して，巫者が行う判断が，超自然的因果論に基づいた説明と解釈がシャーマニズムという。

シャーマニズムとは憑依，障り，因縁，罪障と心身不調の原因を判断し，それに対して祈祷，祓，供養と言った対抗処置を講じるとともに，さらなる処置として業を課すことでもある。

この考えは，心身不調を身体内の機能不全とは看做さず，外在的な超自然的存在（たとえば「霊」という観念）の侵入もしくは影響によるものとする解釈を行うことである。それは主としてマイナスの評価を付与されたものが多い。死霊，無縁仏，未成仏の先祖と言った死者霊ないし仏から種々の動物霊におよぶ。

それに対して，巫者の場合，なんらかの神仏のつまり神の憑依において巫儀を執行する，と一般に信じられている。従って，巫者とクライエントとの憑依霊に対する関係は異なっているのである。これに関しては，シベリアのシャーマニズムの研究者シロコゴルフの見解が参考になる。[1)]

ごく普通の人間をシャーマンとする，最も重要かつ特徴的な条件は，諸精霊の主人であるという点である。精霊によって憑依された人間とシャーマンとの相違も，本質的なものである。なぜならシャーマンは，自分の意志で自分自身の中に諸精霊を導き入れるからであり，またシャーマンがその執行を欲する際，シャーマンは自分の身体を精霊の宿り場として用いるからである。従って，諸精霊の自発的な導入もまたシャーマニズムの対象となる。

2．憑依とシャーマニズム

シロコゴロフは，諸精霊の主人であり自発的に精霊を導入するシャーマンと，受動的に精霊によって憑依される人間とを区別している。すなわち，2種類の憑依が区別されている。自発的憑依と非自発的憑依がそれである。

この見解は，日本のシャーマニズムにもほぼ当てはまる。巫者の憑依は自発的なものであるのに対して，一般のひとびとの憑依は非自発的なものである。そして前者の憑依は善霊であると言うプラスの評価を付与され，後者の憑霊は邪霊としてマイナスの評価を下される。しかし，自発的であれ非自発的であれ，憑依とは心理的，生理的現象である以上それは社会的関係によって規定されて解釈と評価を伴う文化現象であることに留意しなければならない。

こうした問題の論じ方にはそれなりの常識と言うものがあり，手順があると思うが，そもそも本稿を書こうとしたきっかけは，臨死体験の所でも引用したユングの「チベットの死者の書の心理学」の中の次の文章に出会ったときである。[2)]

「（チベットの死者の書にかかれている）この死者儀礼は，言うまでもなく，合理的見地からみれば霊魂の超時間性（不滅）に対する信念にもとずいているものだが，非合理的見地からみれば，死者たちに何かしてやりたいと言う，生者の要求にもとずいているのである。これは，血縁者や友人の死に直面したとき，どんなに教養あるひとをもとらえてしまう，全くどうにも出来ないたましいの要求なのだ」

元本学教授・本学非常勤講師

「我々が，我々の内にあるたましいの要求を排除し，逆に合理化しようとしてきた。我々は，我々がそういう不死への願望をもたないかのように知的にふるまい，死後の生を信じることができないからこそ，絶対に何もしょうとはしないのである」

明確に言えば筆者の死についての観念は「死んだらおしまい」と言う一言で表現できる。筆者の調査でも「終わり」「休息」を合わせると54%の学生が筆者と類似した考えを持っていたのでかなり一般的な死の観念と言える。

ところで、こうした死に対する態度は自分の時はそれでいいのかもしれないけれどもユングも言っているように，はなはだ困るのが「血縁者や友人の死に直面したとき」である。筆者は長くこの「死んだらおしまい」と「死者達に何かしてやりたい」という間で苦しんだ。

3．シャーマンにかかわる個人的体験

一例を上げると，個人的なことになるが，20年近く前，子どもを残して兄嫁が亡くなった。筆者の育った地方は，こうした時よく巫女さんを呼んできて「口寄」をやってもらう。筆者の母もよく呼んできてはやってもらっていた。筆者は，その巫女が無学なおばさんであるという理由と「死んだらおしまいという」科学的（？）「あの世」観のために同席せず襖一つ隔てたところで姉がでてきたときどう言うか関心はあったので聞いていた。

巫女さんがトランス状態になって，いよいよ姉が出てくると言う時，「残してきた子供のことが心配で……」と語り出せば，こうしたことに批判的だった筆者をふくめて家族も胸を打たれることが多かった。

「或は近い頃死んだ親族などの口を寄せて聞くと，その言うことが誠に悲しい。自分も幾度かその席にいたことがあるが，婦人などは声を立てて泣かぬものはない。どう言う秘伝があるかは知らぬが，余り平そくの合わぬことはいわない。なん才の男または女と言うばかりであるのに，老人なり若者なり志すものそうおうのことを答える。故にこの世の中でも，乞食のような女だとは思いつつ，やはりタタキミコを頼むものが絶えないのである」[3)]

近親者の死は，特に若い人の不幸な死は「誠に悲しい」わけである。しかし，20代の筆者は，「襖一つの距離」を縮めることができなかった。

「何等の前提を持つことなく現象を正面からみてゆこうと言う点において，死に関する研究は，科学的と呼べるものである。しかし，その際に相手を客観的な対象として扱うのではなく，出きる限り相手と共感し，経験をわかちもとうとする点に於て，従来の自然科学的な態度とは異なると言っていいだろう。しかも，それは研究者自身の内面に対しても目が開かれている点においても，従来の自然科学とは異なるといってよい」[4)]

「（死んだ兄嫁が）今，われわれにどうして欲しいか聞いてみよう」と言ったようなことは心理学という「学問（？）」を志していたあの当時の筆者に「誠にかなしい」と言う思いは持ちながら，「巫女」とか「易」にはしる人の姿は，受け入れられなかった。しかし，心理療法をする人間が，たとえばの話ですが，「（来談者に対して）あなたの言っていることは非科学的だ」なんて言っていると，また，直接言わなくても，とらわれていると人間関係そのものが出来ません。「なぜ死んだ人の声を聞きたいのか」そこから出発するしかないことを今ごろ気づいてきました。「研究者自身の内面に目が開かれている点」に筆者の問題があったのではないかと言うのがこのごろの反省です。

こう反省した筆者は，実家に帰り，20年前に姉の降霊をしてもらったＳ巫女を捜し出し，その人に面接を申し出て巫女としての自伝的回顧をしてもらった。以下はその記録の要約である。

4．Ｓ巫女の変身の契機

彼女は，Ａ市の漁港の良家のお嬢さんだった。昔からの家を守っていたが，35才くらいの時，夫が友達の借金の証文の連帯保証人になって，先祖

からの大きな屋敷田畑すべて抵当に取られてしまった。夫婦ともだまされて家財を失ってしまうのである。

しかし，彼女は，失意のショックで一月寝込んでしまい，飲まず食らわずの生活を送る。しかし，そこまで追いつめられても人をうらまず，家の近くの観音の信仰に入る。本体は小さな石像の観音である。そのきっかけは，ある日，足が自然にその観音さんの方に向くようになったことにはじまる。一日20から30回足が向く。気がついたら観音さんのところに居るというようなことが続いた。気持ちがどんどん観音さんに一体化して行くにつれて，ある時，手を合わせていると，不思議なことに「目の前におられた観音さんが動き出して，突然私ののどの下あたりに飛込んで来た」と言う現象が起こる。それ以来，彼女は人の心が読めるようになり，死者との会話ができるようになり，自分でも奇跡のような不思議なことが起こるようになったと言う。

観音経は，一部しか唱えられないが，ほとんど自分流である。観音さんが飛込んで来られて，しばらくしてから，口のあたりがもごもごして，言葉が出そうになる。

それからは，先輩のシャーマン（巫女）について，言葉の切り方を教えてもらう。しかし，「私はすぐに言葉が切れるようになった」。その後一人前の巫女として自立して仕事をするようになった。しかし，彼女が他の巫女とちがうのは，あくまで自分の「超能力」は，観音さんからのさずかりものなので，すべて無料でお金を取らなかったところである。そのためよけいに信頼が高まり，近くで彼女を知らない人はないほど有名な巫女であった。以下の事例は，彼女に拝んでもらった人たちの面接記録の一部である。S巫女は「巫女」と呼ばれたり「祈祷師」と呼ばれたり「おがみやさん」と呼ばれたりと，いろいろであるが「霊降し」の仕事の依頼が一番多い。以下の事例は，S巫女により降霊経験をしたクライアントたちに筆者が面接して集めた事例である。

5．S巫女のクライアント諸事例

事例1

40才くらいのおばあさんで御霊下しをするS巫女（シャーマン）を呼んで，子どもを残して交通事故死した（依頼者の）息子の嫁の霊を呼んでもらい息子の再婚のことに付いて告げる。祈祷師には何も話さなかった。本名と死亡年月日を教えただけである。ろくに経文も上げないのに嫁の霊が出てきて「毎度祭ってもらって嬉しい」と言った。

自分は「嫁の二人の子を育てるのに祖父母では弱い子になるという。それで息子に嫁を向かえ育ててもらおうと思う。息子も若いから一人身にしておくわけにも行かないから了解して来れ」というと。

「どうしょう，どうしょう」と泣く。

それから息子の傍らへいき「お祭りしてもらって，うれしい」と礼を述べてからさめざめと泣く。

「自分の命短くこれということも出来なかったがこれからは貴方の心次第である」と息子にすがりつくように頼むようにいって泣く。

今度はおばあちゃんの傍らへ行って「どうにもならない子供のことが気になる頼むなんとかして来れお願いや情けない」と残念そうに嘆く。

おばあさんが「二人の子は私が影ながら面倒見るから心配するな」というと

「頼む，頼む」というように祖母の肘にうつぶして泣いて祈るようであった。

霊を長く呼び寄せると仏のくらいが下がると言われるので霊をすぐに戻し祈祷師は正常に蘇った。

事例2

亡くなったおじいさんの霊をS巫女に降ろしてもらった。

一分もせぬのにS巫女はおばあさん（依頼者の妻）の傍らに行き肩を背中を膝を撫でさすり遂には畳に頭をすり付け「済まなかった，なんにもせずに死んで悪かった」と体中をさすり「3年のうちに幸せがあるようにするからまって来れ」と両手を合わせ妻を拝むのであった。なんたる不思議

どう解釈してよいか言葉もない。

おじいさんは依頼者の妻が晩年世話をしていたが，遺言を残さず死んでしまったため遺産は，世話をしていないが法的に養子縁組をしている若夫婦にすべていくことになってしまったことが霊を呼び降ろすきっかけであった。

事例3

大学生の話である。彼は，高校2年から3年にかけて，酷く腰痛で悩まされていた。大きな病院へ行っても，心理的なものとしてしか扱われずっと痛い思いをしていた。ある日父と母が「何かがついているんじゃないか」と思い，S巫女という「おがみやさん」の所へ行って，見てもらいました。すると「3才の頃高い所から落ち，背骨がずれているためである」といわれました。それで紹介された，接骨院に行き見てもらうと本当にそうでした。父も母も忘れていたことなので，大変びっくりした。それ以来，何かあるとその「おがみやさん」の先生のところへ親戚じゅうで行っているとのことである。

6．受動的憑依の諸事例

前節までは，自発的シャーマニズムについて述べてきた。次に受動的シャーマニズムとも言うべき憑依現象について考察しよう。以下は筆者が学生・友人・知人等からの聞き書きしたものである。

1．シャーマニズムと言うそれじたいはいいも悪いもないと思う。しかし，最近では，「供養してやる」「悪霊がのりうつっている」とか1種の弱みつけこんだ，悪徳商法がはびこっているから，今までのような，おそれ多いものという見方が出来なくなってきているのではないだろうか。一歩間違えば「やらせ」などと言われるかもしれない。

2．「せんさま」に憑かれた小学6年生の女子の場合，全身から力が抜け，右手が硬直し，口がきけなくなったと言う。少女の担任の女教師は「何かにすがりたいと言う不安感が広がっているため本当に信じこんで暗示にかかった」と言い，運動神経の発達した男子に目を閉じて片足だちで両手を水平に保たせる注意実験をさせ，「だれでも自然に手先が動いてしまう。ただそれだけのことなのよ」と実証的に説明した。[5)]

3．「霊魂さん」という遊びがあった。コックリさんに似たものだった。「霊魂さん」とは，きつねのことで，きつねを使って占うものだった。それが流行ったのは，僕が小学2年か3年の頃で，みんなよく公園に集ってやっていた。ところが，それをやって「きつねの霊がついた女がいる」と聞いてパッタリ皆やるのをやめた。その人を見て，みんなやめた。なんとその人は本当にきつねのようで，手がダラーンと垂れ下がっていた。それ以来そういう占いはパッタリ流行らなくなり遊び方も変った。今考えると，彼女は単に，目が細くて，顔が長くて，手をダラーンとさせるくせを持っただけの人だった。

4．コックリさんをしたことがある。男3人で，中学のプレハブ校舎へ行き50音と数字を1から10まで書き「コックリさんコックリさん……」と3人で1つの10円玉に指を乗せて，やりはじめたが一向に動かない。5分，10分……いろんなことをためしたがうごかなかった。ところが，15分たったところで「あなたは本当に存在するのですか」と聞いたところ10円玉がなんとピックピックと動きはじめた。「やったあ」と思ったら，友達の一人が指に力を入れ動かしていたとさ。チャンチャン。

5．コックリさんの話が出たが，中学校の頃やった記憶がある。でも，まったく信じていない。あれは手で動かしているのだと思い，信じている人を不思議に思った。時々，自分が10円玉の上に手を載せる役をやり，10円玉を動かしたりした。大体，話がもりあがる方へ10円玉を動かしたものだった。そうすると皆信じていたようだった。

6．僕は占いのたぐいが大嫌いで，絶対に信じない。僕が中学生の頃，学校でコックリさんが流

行っていて，クラスの皆もやっていた。そして僕は「そんなもん迷信に決ってるじゃねえか」と馬鹿にした。するとコックリさんは「3月以内にあなたは事故死する」とおっしゃったのだ。が僕は，今でもピンピンしている。どんなもんだ，ばかたれ。

7．コックリさんを行っている最中に悪寒が生じ，ついでひどい頭痛が始った。コックリさんを止めると，悪寒は消えたが，頭痛の方は一層激しくなり，翌日から学校を休みがちになった。脳神経科，精神科などいろんなところへ行ったが，原因不明であり，精神安定剤をただ投与されるばかりだった。少女の両親が彼女の知らない間に，「霊能者」を訪れると，「少女についていたのは母の姉の別れた亭主で，彼も頭痛持ちであり，交通事故で死去し，無縁仏となっていたのを供養してほしくて，コックリさんを通じてとりついた」と言うことが「霊能者」の「遠隔霊視」によって判明し，「除霊，供養」が「霊能者」によって行われた。それとともに少女の頭痛は治ったと言う。

8．AとBのふたりで「キューピットさま占い」をやろうと言うことになった。ゲームを進めているうちに何かのひょうしに占いの文字盤の出口が破れてしまった。破れたのを契機にAの目がつり上がり，突然Bに殴りかかって行った。しばらくしてCがやって来たのでふたりがかりでAを押さえようとしたが，なおも襲いかかって来るので，ふたりはトイレに隠れたが，Aは執ようにドアをよじ登ろうとしたり，声をあげながらドアをたたいたりしていた。Aがいなくなったと思いBとCが外にでると，Aはふたりを見つけ再び襲いかかった。そうかと思うと駆け出したりした。その後ほかの生徒も集り，みなでAを押さえようとしたところ，彼女は転倒し，これを契機に平静に戻った。その内にBがもうろう状態になり，ついで運動暴発を呈し急に走り出し，4階にあるベランダから飛び降りようとした。Bが平静になると，ついでC，Dにももうろう状態，運動暴発が出現した。この事件を契機に，その後4日間にわたって，この4名のほかに5名の生徒に失神，もうろう，運動暴発などの症状が出現した。

9．私が小学生の時，小学校でも，中学校（M町）でも催眠術遊びが流行った。特に中学校でものすごく流行った。のりすぎて本当にかかった子がいたり，頭が痛いとか頭痛がきえないの訴えがあって，小学校の先生が「おまえら（中学生のように）絶対したらいかん」と催眠術遊びの禁止令を出すほどだった。「じゃあ」と言うことになって，コックリさんが流行り出した。私はコックリさんには手を出さなかった。その理由を今から説明します。男子も女子もやっていた。私は怖かった。危険が伴った。規則が厳しい。「誰が何時死ぬか」聞いてはいけない。占いをした後は，アブラアゲをあげてお礼をしなくてはいけない。一度友達とやった時に本当に鳥居に帰ってくれないことがあった。やたらと10円玉が暴走したり，紙の外に飛出したりした。「どうして帰らないのか」と聞くと「見ているまわりの人に気に入らない人がいる」「どうしたら帰ってくれるか」と聞くと「殺せ」と指が動く。私は危険を感じたのでそれ以来やらなくなった。

10．僕が小学校6年の時ちょうどコックリさんが流行っていました。好きな女の子の名前や，両思いか片思いかなど聞いていた。ある日，放課後「公民館に行ってコックリさんをしょう」と言うことになった。人数は6人。その時僕は見るがわだったので，座っていた。最初は普通にやっていた。ところが，そろそろ終ろうと言って「コックリさんコックリさん有難うございました。北の窓からお帰り下さい。お帰りになるなら，『はい』の方へお進み下さい」10円玉は「いいえ」の方向へ。それからがパニックだった。やっている2人の指は紫色に変り出し，声がふるえ出して来ました。何回聞いても「いいえ」。理由を聞いても「いいえ」。そんな時間が30から40分ぐらいだったと思うが，皆で声を合わせてもう一度お願いしたら「はい」の方向へ

行きほっとした。でも本当にびっくりしました。

11. 彼女は，大変な倍率を見事突破して，今は高校の英語の教師として勤めている。彼女は，受験勉強をしていたある日，右手が急に動かなくなった。受験がひかえているので心配した両親は，外科の医者に連れて行くが医学的にはどこも悪くないと言われた。しかし彼女の手は動かないし，彼女はじっとしていると痛いと言う。特に手首の関節がおかしいと言うのである。ある時，彼女は，自分からある宗教家に見てもらったところ，彼女の右手に「水子の霊が憑いている」と言う。本人は身に覚えがないので，帰って母親に問い質したところ，自分と弟の後にもうひとり生まれたが中絶したという話を聞き及び，彼女は，その宗教家に「除霊」をしてもらったところ，手の痛みは取れて，また動くようになったと言う。それ以来彼女はその宗教の信者になっている。

12. 私の母親のおじいさんは村長をしていた。母親のお母さんは，婿とりで地域ではやりてであった。そんな関係から，母はよく自分のその母親におがみやさんに連れていかれた。「この子はえらい顔している」「神が憑き易い顔だと言われた」と私によく言った。「そんならおがみやさんになったら」と言うと「まだはやい」と言って自分に自信を持っている。

　そんな私の母について話します。

　母は本当は2番目だが，その姉が幼くして死んでしまったので，長女です。母が3才になった時に，弟が生まれることになった。祖父のお姉さんが同居していた。この人「丈夫に生まれるよう」『おみさきさん』（お稲荷さん）に願をかけた。ちょうどそのときに親戚に不幸があった。弟は無事出産した。不幸があったので，お礼参りに行かなかった。母は，夜中になると（2－3時）体が熱くなって「ピョン」と起きる。おばあさんが一緒に寝ててくれたんだけど，あっちに寝たらふとんをはずしそうだと言うと，どうしても寝れなくて「ワンヤ（親戚）のじいさんとこへ行く」と言って起きる。「ウエーウエー，行く」と言って母が泣くので，しかたがないので，赤ちゃんが小さいけれども納得させるためじいさんの所へ連れて行く。ところがそのじいさんはイビキが酷いので連れて帰る。それが半月毎日なので大変になった。いいかげんに疲れて，まわりの人がつきあっていられなくなった。おとうさんが怒った。「おまえは人を寝かせない」と言っていままで人をなぐったことがない人がなぐりかかろうとした。すると母は突然「おみさきさんに行くー，行くー」と大声で叫んだ。そこでおばさん（姉，願をかけた本人）がはたと気がついて「私が悪かった」と言う。弟が生まれたのに，お礼参りに行かなかったから，母の体を借りて，とりついて，来るように催促なさっていたのではないかと言うことになり，それでアブラアゲを持ってお礼に参りに行ったら，翌朝から母は夜中にはた迷惑なピョピョン飛び跳ねることをしなくなり，夜中もグッスリ眠るようになった。

13. これは以前母から聞いた話ですが，昔母が小平というところに住んでいたころ，向のおばさんがおきつねさまにとりつかれて，真夜中に近所をはだしで走りまわったり，大声をだしたりしたそうです。それから，夜中に「コーンコーン」とないたりもしたそうです。そんなことが何日も続いて，その人の家族や近所の人も大変心配しているとある日真夜中，突然その人が家族や近所の人を起こして「天ぷらをあげろ」と言ったそうです。みんなは逆らってはいけないということで夜中に天ぷらを3皿ぐらい作りました。きつねにとりつかれた人は3皿の天ぷらをぺろりとたいらげ家族である「Aを残して皆部屋から出ていけ」と言ったそうです。そして皆が出て行く時，きつねにとりつかれた人はAさんに2時間ほど説教したそうです。その内容は，「以前にそのきつねさんのこどもがAさんの仕掛けたわなにかかり足を痛めびっこを引くようになってしまった」と言うのです。その母きつねは涙を流しながら「足が不自由になってしまったこどもがかわいそうでならない」と言っ

たそうです。Aさんも涙を流しながら謝ったそうです。そしておきつねさまも気が済んだのか「もう朝になるから帰る」と言って，きつねにとりつかれていたおばさんはそのまま丸1日眠り続けて，目が覚めた時には，きつねにとりつかれていた時の記憶はなかったそうです。

14. ある日私のおばあさんが歩いていると，ごみすて場の方から声が聞こえるので行ったら，お稲荷さんが捨ててあったので，お稲荷さんを家に持ち帰って，お稲荷さんを洗って神棚に祭った。ある日，神棚のろうそくが倒れ神棚が燃えた。でも被害は大きくなかった。お稲荷さんが被害を抑えてくれたとおばあさんが言っていた。そのお稲荷さんは背中が焦げました。のら犬みたいです。それいらいおばあさんはこのお稲荷さんの夢を見るようになりました。夢のなかで，お稲荷さんが「この家に私をおいといて」と言った夢を見たと言っています。また，お稲荷さんが夢のなかで「けがに注意」等と忠告してくれると，朝はおばあちゃんは塩で清めてくれます。

15. 7年前の事だが，うちのおばあさんが死んでその年の9月ころの台風の日の夜に，どこも窓が開いていなかったのに，おかあさんの枕元に，しまへびがはいまわっていたことがあった。その時，おかあさんは「このへびは，なーんも怖くないよ，このへびは死んだおばあさんが家のことが気掛かりで，見にきたんだよ」と僕に言ってくれました。何かほっとしました。

16. 今から話すことは，以前に母が父のところへ結婚して家に来ると自分の母は結構きれいずきで，嫁に来てから，家の大黒柱をちょっと動かすと母ののどがとても苦しくなった。母は最初何でこんなに苦しいのかと相当苦しんだそうです。それでいろいろ考えたところ，大黒柱をちょっと動かしたことに気づき，それを元に戻して動かないようにしたとたんに母ののどから，毛のついた玉みたいなものが出たという。だから，「簡単になにかそういうものを動かさない方がいいよ」ときかされました。

17. 私の友人Aは，中学3年生の時あやまって彼女に妊娠中絶をさせた。ある日彼が友人と話している時，その友人から，「おまえのひざにあかちゃんがいるような気がする」と言われたという。また，この間Aが実家に電話をいれた。妹がでた。そして，彼が実家に帰った時，妹が戦慄するようなことを言った。「おにいちゃん，このあいだの電話の時そばで泣いてたあかちゃん誰。あかちゃんの泣きごえでおにいちゃんの声があんまり聞こえなかった」と言われた時，友人Aは恐ろしくなりお寺に出かけた。

18. うちの父親の田舎は山奥でダムの上の方の村です。お盆や正月はよく行きます。小学校の夏に田舎へ行って田舎の友人と神社へ遊びに行った帰り道，近道しょうとして神社の森の中をぬけようとしたら，杉の木にいわゆるワラ人形がくぎで打ってあり，それが6つくらいありとてもびっくりして走って家に帰りました。そしてその友達が「もう一回行ってみようぜ」と言うので，もう一度見にゆきました。すると友達は何を考えたのかいきなり「ぬいたれ！！」と言ってそのワラ人形を抜いて，川に捨ててしまいました。そして，次の日友達は「昨日の夜，胸が苦しくてねれやんだは」と言っていました。そして今ときどき電話をすると友達は「いまだに時々夜胸が苦しいわ，やっぱりあの時のたたりかいな」と言ってタバコをぷーとふきつける音をさせます。こういう友達を持った私はとてもたのしい。

7．シャーマニズムの問題と批判

以上が筆者が面接して収集した「憑依現象」とかかわる事例である。

そもそも現代科学によりもたらされた物質文明の過剰な発達とその結果生じた自然破壊，公害問題などの反省から，最近いわゆる反科学主義の風潮が高まっている。ここで引用したようなオカルト遊びが小学生・中学生にまでひろがっている。

また，各種の「占い」もマスメデイアにより宣伝され，一般国民にもまたそれを受入れる素地が

できているように思う。たとえば，「コックリさんあそび」がこの科学偏重主義といわれる現代教育を受けている児童，生徒に蔓延していること自体は，社会病理的に見て興味ある題材である。

「コックリさんあそび」の流行については，色々の立場の人がそれぞれの流儀で文明批評を試みることが可能である。かって「コックリさん占い」は第二次世界大戦後の情報統制社会で流行した。しかるに現代は情報が氾濫している。しかし「情報の氾濫は，個々人にとっての必要な情報が皆無に等しい」ともいえ，ここに占いの存在意義があるといえるかもしれない。もっとも個別の人間にとって最も切実な情報とは，その人にとっての「たましい」の情報であるといえるかもしれません。それは，たとえば亡くなった最愛の子どもとの対話への要求である。現代科学が死者の蘇生を可能にできない限り，人間の最も奥深い要求である「たましい」のふれあいは，S巫女を通して死者と語らう事例１－３のようにスピリチュアル的手法であるシャーマニズムを通して行うしかない。

参考文献

1）佐々木宏幹 「憑霊とシャーマン」 東京大学出版会 1983
2）ユング 「東洋的瞑想の心理学」 創元社 1983
3）柳田国男 「巫女考」 柳田国男全集 9巻 筑摩書房
4）河合隼雄 「宗教と科学の接点」 岩波書店 1977